

遠藤 康 (Ko ENDO)

学位：Ph.D. (Sanskrit)

略歴：駒澤大学人文科学研究科修士課程修了

プネー大学（インド）大学院サンスクリット語プラークリット語専攻 M.Phil.課程修了

プネー大学（インド）大学院サンスクリット語プラークリット語専攻博士課程修了

専門分野：インド哲学史

研究課題：ヨーガ派の思想史文献史研究

ナート派を中心とする中世ヨーガ思想研究

【論文】

- ・「ヨーガ的身体論の資料：『六輪解説 (Śaṭcakranirūpaṇa)』試訳（２）」（『愛知文教大学論叢』第 24 巻、2022 年 2 月）
- ・「アングロ・インディアン科学者 J. C. Oman のヨーガ行者評と帝国意識」（『愛知文教大学論叢』第 22 巻、2019 年 11 月）
- ・「転変説と時間論に関する『ヨーガ・バーシュヤ』の『俱舍論』依拠」（『愛知文教大学論叢』第 17 巻、2014 年 11 月）
- ・「『ゴーラクシャシャタカ (Gorakṣaśataka)』におけるヨーガ支 dhāraṇā」（『東海仏教』第 58 輯、東海印度学仏教学会、2013 年 3 月）

【その他】

- ・公益財団法人日本高等教育評価機構大学機関別認証評価評価員（2020 年 4 月～2021 年 3 月）
- ・東海印度学仏教学会理事・幹事
- ・高大連携事業授業「古代インド説話と『今昔物語集』：月のウサギの話」（高松学園伊那西高等学校、2021 年 10 月）

令和 5（2023）年度ティーチングポートフォリオ

氏 名	遠藤 康	職位／役職	教授／大学院研究科長
-----	------	-------	------------

1. 教育の理念

本学学部教育の目的には、自他の文化に関する幅広く深い理解に基づく人文知の育成が、大学院のそれにはアジア及び日本の文化を理解する能力を持ち社会の要請に応じることのできる人材の育成が含まれる。これらの達成のために、常に広い視野を持ち、情報を的確に把握整理し、そして主体的かつ批判的に判断できる学生の育成に、インド哲学史・文化史の研究により得た知識を基盤として寄与したいと考える。同時に、人間の真の幸福とは何かを、学生とともに考えることのできる教員でありたい。

2. 教育活動の内容

担当授業（2022 年・2023 年）

アカデミアゼミ A・B・C・D、世界宗教の基礎知識、インドの歴史と文化、インド仏教史、日本仏教史、研究指導（南アジア文化）A・B・C・D [大学院]、研究倫理・方法論 [大学院]、研究倫理・方法論（留学生）[大学院]、アジア社会文化研究 2 [大学院]、南アジア歴史文化論 [大学院]、アジア宗教文化研究 [大学院]

3. 教育の方法

講義形式であれ演習形式であれ、学生が資料を読んで記載される情報を的確に理解し、それを説明・批評できることが重要と考える。そのため、講義においては、教員による説明や情報提供とともに学生による教科書や資料の読解を重視している。そして質疑応答あるいは筆記による意見表明も毎回要求している。また期末試験以外にも、ルーブリックを用いて記述式の課題や試験を実施し、学生の資料読解力と理解内容の表現力の向上を目指している。

演習においては、学生による資料読解、質疑応答をととしての意見表明を重視するとともに、アカデミックな文章による表現能力の向上に重点を置いた指導を行っている。後者は、学生自身が選んだ研究主題に関するレポート作成の指導を通じて行われるが、その際、客観的論拠に基づく意見表明を重視した指導と、適切な参考資料を使用することができるような支援にも努めている。

4. 教育活動の成果・評価と改善方策

2022 年度授業に対する学生による授業調査アンケートの結果に関する所感と改善方策を記せば次のようである。

インド文化関連科目については、学生になじみの薄い主題であるためか、あるいは実用的知識につながらない科目であるためか、または学習すべき内容がやや多いためか、所期の成果を得られたとは言い難い。これらの科目については、哲学や宗教の現代的意義づけ、現代の世界情勢や日本の状況との関連付け、興味深い教材資料提示などにより、受講生に興味を持ってもらい、理解度を向上させるよう努力したい。

宗教一般や日本仏教に関する科目では、概ね良好な成果があったと考えるが、全員について所期の成果が達成できたとは言い難い。より一層丁寧な授業とフィードバック、受講生の興味を維持する努力を

継続したい。

演習科目においては、学生間での意見表明が活発とならなかった点を反省している。この点は2022年度末の本学FD研修会での議論が大変参考になったと考える。学生同士のディスカッションの機会を増やすよう心掛けたい。

5. 今後の目標

より良い教育成果達成のためには、学生とのコミュニケーションが肝要であると改めて実感している。顧みれば、これは知っていて欲しい、あれも理解して欲しいという思いが先に立ち過ぎていたようにも思われる。今後は、適切な距離感を維持しつつ、学生とのコミュニケーションをより一層深める努力をしたい。